

仕事帰りの電車の中で、昨夜の夢を振り返ってみた。

あまりにも奇妙な夢だったので、全てを鮮明に覚えている。

カレのことがとても気になってくる。おかしな話だ。

僕が幼少の頃から近所で掃き掃除ばかりしているただのおっちゃんじゃないか。

でも、この前はゴミ袋をあさりながらバットを持つていたじゃないか。

いや、あれは僕の錯覚だったんだ。

そんなことを考えている時、何者かの視線を感じた。

電車の中は混んでいる。僕は携帯電話を取り出し、フォトモードにした。

携帯電話を見る振りをしながら、カメラに写る画像で周りの人達の目線を確認するという訳だ。

すると一人の紳士がこちらを見ていた。最近の携帯電話は高性能である。ズームボタンを押して、紳士の顔を確かめたがよく分からなかった。

そうこうしている内に、終点の奈良駅に着いた。その紳士もまだシートに座っている。

僕は立ち上がり、携帯電話を閉じた。階段へ向かうと紳士も後を追ってくる。

やはり尾行されているのだろうか。上等ではないか。こちらから仕掛けてやろう。僕はさり気なく鞆からハンカチを落とした。

「お兄さん。お待ちなさい。ハンカチを落とされましたよ」

背後から紳士が微笑みながら歩み寄ってくる。

「これはこれは、どうも有り難うございます」僕は手を差し伸べ、ハンカチを受け取った。

その紳士は上品で仕立ての良いスーツを着ている。襟には社章だろうか？ 緑色のバッチを付けていた。

僕は会釈をし、足早に去った。僕の姿が見えなくなるまで紳士はその場で微笑んでいた。

家に着くなり僕はインターネットで緑色のバッチを調べてみた。しかし、なかなか上手く調べることができなかつた。

諦めかけたとき一つのホームページがヒットした。

どうやらこれに間違いなさそうだ。『奈良史跡文化研究室』というそのサイトには、東大寺や興福寺、春日大社などの紹介や成り立ちが記載されている。

また、奈良市に属する公共団体であることや明治に設立され現在に至ることが説明されている。

写真も載っていた。よく見ると見覚えのあるある顔だ。そう、あの尾行していた紳士ではな

いか。

写真の下には、『主席研究員 坂本晃三』と書かれていた。

#13

何故だか分からないが、あの紳士のことが気になり始めている。どこかで見たことがあるような感じだ。

いつも通り出勤するために朝は六時に起きる。まずは犬を散歩に連れて行く。最近ではほとんどの家庭で犬が飼われているようだ。基本的に小型犬が多いようだ。毎朝見かける飼い主さんと気のない挨拶を交わしながら、毎日同じコースを散歩している。

家に着くと餌を与え、ブラッシングをしてから部屋にあげる。

この時点で時計は七時を指そうかとしている。この頃、サヤカは食パンを焼き始める。

僕がダイニングに行く頃にはコーヒーマーの香りが部屋中に広がっている。

サヤカはご飯よりもパンが好きなようだ。

バターを広げ、お気に入りのブルーベリージャムを塗っていく。

「できたわよ。コーヒーマーにミルクは入れるのかしら？」

笑顔で問いかけてくる。

「こんな朝をきつと幸せというのだろうか。」

「行つてきます。今日もいつもと同じくらいに帰つてくるからね」

僕は新聞を読み終え、サヤカに向かつて最高の笑顔を贈った。

八時には京都行き急行の座席にいる。始発の駅だから全く混雑していない。

僕はいつもと同じ車両の同じ席に着く。暗黙の了解とでもいうのだろうか、僕の座席は僕が座る。決して他の人が座ることはない。

稀に新参者が何も事情を知らないで、僕の指定席に座っていることがある。仕方ないので、僕は他の常連客の指定席を外して座ることにする。

いつもと視線が変わるので少し新鮮だ。

ふと気がつくといつも見かける女性が来た。彼女は僕の指定席の左斜め前に座る。そこは彼女の指定席。

今日は、僕が彼女の真正面に座る形となった。年齢は二十代半ばから後半といったところか。よく見るとなかなか奇麗な顔立ちをしていらつしやる。

色白の彼女はオフスレディーだろう。決して派手ではないが流行を取り入れたセンスの良い服装。時計はオメガのシーマスターを右腕にはめているようだ。

実は、以前から彼女と目が合うことがある。特に気にはしなかつたのだが、やはりかなりの頻度で目が合ってしまう。

そうこうしている内に、僕は電車の揺れに取り込まれるかのように浅い眠りについてしまうのだ。

だから、彼女がどこで下車するのか知らない。知つても仕方ないのだが。

京都駅に着くと、通勤客がごったがえしている。僕は会社に行きたくないという自分の固い意思とは裏腹に、とりあえず職場に向かわなければならぬという腹立たしさから、この人混みに対しかなり苛ついている。

ふらつく足で階段を上がっているとあの紳士らしき後ろ姿を見た。間違いない。主席研究員の坂本晃三だ。

いったい京都で何をしているのだろうか。

彼は先日と同様に、仕立ての良い上品なスーツを着ていた。高価そうな革のバックを持ち、穏やかに歩いている。

ちようど良い。無性に気になつていたので。昔から彼のことを知つていような感覚というのだろうか、喉に何かつかかえているような気がしてならない。

僕は会社を休んであの紳士を尾行することにした。

職場へは後から電話でも入れておけば問題ない。それより、今僕には主席研究員 坂本晃三

がこれからどこで何をしようとしているかの方が大事なことなのだ。

続く